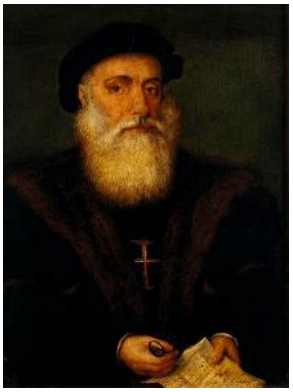
# ヴァスコ・ダ・ガマ 出典: 『ウィキペディア』



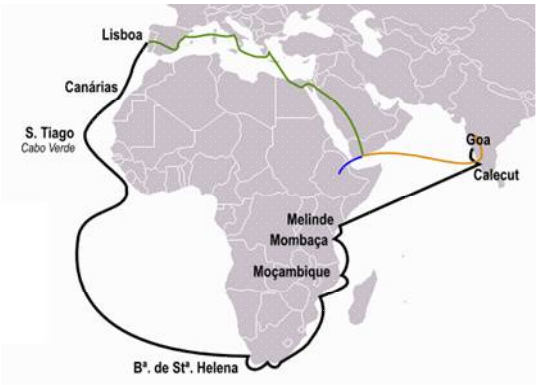
ヴァスコ・ダ・ガマ（Vasco da Gama, 1469年頃 - 1524年12月24日）は、ポルトガルの航海者で、探検家である。ヨーロッパからアフリカ南岸を経てインドへ航海した記録に残る最初のヨーロッパ人であり、しばしばインドへの航路をヨーロッパ人として初めて「発見」した人物であるとされる。このインド航路の開拓によって、ポルトガル海上帝国の基礎が築かれた。バスコ・ダ・ガマとも。

**第1次航海**

ポルトガル王マヌエル1世によるインド航路開拓の命を受け、ダ・ガマ率いる4隻の船団は1497年7月8日にリスボンを出航した。1497年11月22日、アフリカ南端の喜望峰を通過し、当時はアラブ人支配下にあった現在のモザンビークに到達する。当時はアラブ人がインド洋のアフリカ東岸の貿易を支配しており、ダ・ガマはここで水先案内人イブン・マージドを雇い入れて、1498年5月20日、インド南西のカリカットに到達した。

当時のカリカットはアラブ人との貿易で潤っており、ヨーロッパ人のダ・ガマとアラブ人商人とは対立関係にあったが、カリカットのサモリン王は双方との取引を望み、いささか不明瞭ながら貿易許可状を与えた。

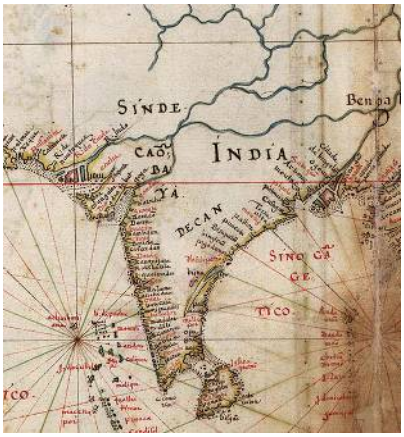
3ヶ月現地に滞在した後、ダ・ガマは数人のポルトガル人を残して帰路につく。帰路は生鮮食料品の不足のため壊血病になる者が続出し、180人の船員の内30～100人がこの病気に罹って死亡した。ダ・ガマの兄パウロも死亡し、乗員の足りなくなった船一隻を放棄するなど苦しい航海が続いたが、1499年にザンジバル島（現在はタンザニア領）に寄航した後、9月にポルトガルに帰還した。




**第2次航海**

「インド洋提督」の称号を得たダ・ガマは1502年2月12日に20隻の船団を率いて再びインドへ航海した。アラブ商人に対してカリカットでのポルトガルの貿易権を獲た功績をもって、帰国後伯爵に序せられた。インド洋航路の開拓は富をもたらし、ヨーロッパ諸国の通商圏を大幅に拡大させた。なお彼は、モガディシ

オにて、伝説の王国プレスター・ジョンを発見したと伝えられている。



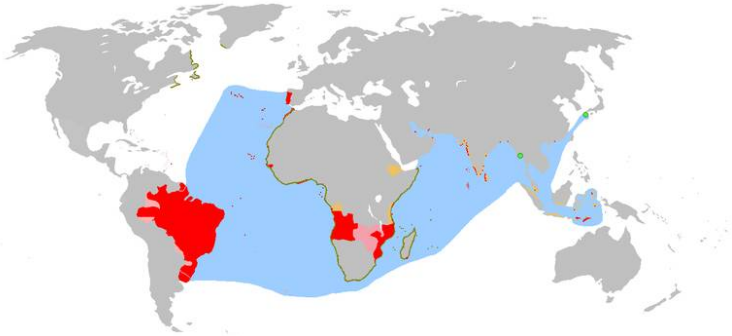

2度目にカリカットを訪れた際には、要求を通すためにカリカット近くを通りかかった船を拿捕し、乗組員を処刑してマストにぶら下げた。また砲撃で大型船を拿捕し人が乗ったまま火をつけたとの記録もある。

**第3次航海**

1524年、インド総督として赴任のため3度目の航海を行ったが、ゴアに到着して間もなくマラリアに感染し、クリスマス・イヴの12月24日に死亡した。

## ポルトガル海上帝国（Portuguese Overseas Empire）

1410年から1999年までにポルトガルが領有したことのある領域（赤）、ピンクは領有権を主張したことのある領域、水色は大航海時代に探索、交易、影響が及んだ主な海域。ポルトガル海上帝国（ポルトガルかいじょうていこく、ポルトガル語：Império Português）とは15世紀以来ポルトガル王国が海外各地に築いた植民地支配及び交易体制を指す。新大陸発見後はトルデシリャス条約によりスペインと世界を二分した。領域支配より交易のための海上覇権が中心であったので、このように呼ばれる。オランダ海上帝国も同様である。メキシコ、ペルーにおける領域支配を中心としたスペインの場合は海上帝国とは言わない。



**概説**

ポルトガルの海上発展の基礎を築いたのは航海王子と称されるエンリケ王子（生没年1394年 – 1460年）であった。航海術や探検に興味をもったエンリケ王子は航海学校を興して、多くの航海者を育て、大西洋上のカナリア諸島（現スペイン領）、アソーレス諸島の探検に派遣、またアフリカ西海岸の探検を着実に進めて行った。

1488年にアフリカ大陸南端に到達したポルトガルは東洋の香料貿易独占とキリスト教布教を目的としてインド洋に進出、沿岸各地に拠点を築いてムスリムと戦い、インド洋の覇権を握った。このため、エジプトのマムルーク朝などイスラム勢力から香料を仕入れて欧州での供給を独占していたヴェネツィア共和国の経済は大打撃を蒙った。ポルトガルはさらにマレー半島における香料貿易の重要な中継地であったマラッカ占領以後、東南アジア

や東アジアにまで貿易網を拡大し、世界的な交易システムを築き上げた。キリスト教の布教は日本において最も成功し、当時人口2,000万程度であった日本で、約70万人の信者を獲得したとされる。

しかし17世紀に入ると、新教国オランダやイギリスも七つの海に進出を始め、ポルトガルと競合するようになる。特にオランダはスペインに対する独立戦争を展開しており、当時スペインと同じ君主を戴いていたポルトガルのガレオン船を拿捕したり、マラッカなどのポルトガル植民地を占領して行った。日本の禁教と鎖国も新教国オランダの反ポルトガル陰謀と言えなくもない。このため17世紀後半以後ポルトガルのアジア貿易は衰退したが、南米大陸ブラジルの植民に力を注ぎ、18世紀にはブラジルで金が盛んに産出されてポルトガルは再び黄金時代を迎えることになる。しかし、1703年にイギリスと結んだメシュエン条約は、結果として金の流出を招き、ポルトガル本国には、それ程、経済的な恩恵を与える事が出来なかった（非公式帝国）。

19世紀になるとブラジルの金生産も低迷し、ブラジル植民地自体が独立を達成してポルトガルから離れていく。ナポレオン戦争後はイギリス帝国が世界の海に覇権を唱え、ポルトガルに残されたのは旧時代の名残りともいえるアンゴラ、モザンビークなどのアフリカ植民地とインドのゴアとディウ、マカオとティモールなどとなるが、これらの植民地も第二次世界大戦後、1960年代に独立戦争が勃発し、最終的に1974年のカーネーション革命をきっかけにしてポルトガルはこれらの植民地の独立を承認した。

## エンリケ航海王子

エンリケ航海王子（Infante Dom Henrique, 1394年3月4日 – 1460年11月13日）は、ポルトガルの王子であり、自らは航海しなかったが、大航海時代の初期における重要人物の1人である。アヴィシュ王朝を開いたジョアン1世の子であり、後に初代のヴィゼウ公となる。

名は単に「エンリケ（王子）」（Infante Dom Henrique）だが、歴史史料などにおいても、「航海王子」（Infante de SagresもしくはInfante de Navegador）の称とともに呼ばれていることが常である。英語圏ではPrince Henry the Navigatorと通称されており、その影響により日本においても英語風に「ヘンリー航海王子」と記述されることもある。他に、「エンリケ親王」と呼ばれることもある。

### 概要

1394年、ポルトガルのポルトにおいて、エンリケはジョアン1世と、ランカスター公ジョン・オブ・ゴーントの娘であるフィリパとの間に生まれた。ジョアン1世の子としては第5

子であり三男に当たる。

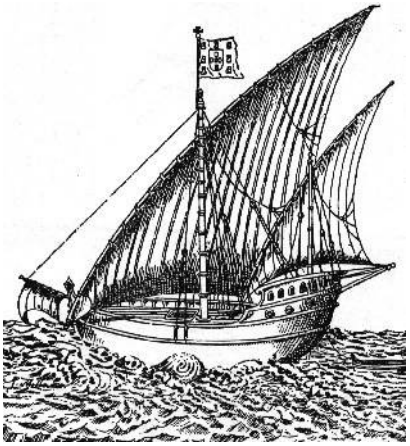
その生涯において、探検事業家、パトロンとして航海者たちを援助するとともに指導し、それまで未知の領域だったアフリカ西岸を踏破させるなどしたことで、大航海時代の幕を開いた。

1420年5月25日、エンリケはテンプル騎士団の後継であるキリスト騎士団の指導者となり、その死に到るまでその地位にあると共に、莫大な資産を保有する騎士団による援助によって、自らの探検事業の強力な資金源とした。このため、特に1440年代までに駆け、エンリケは大西洋への進出に並々ならぬ情熱を傾けると同時に、騎士団における重責についてもおろそかにはせず、以後はキリスト教を熱烈に信奉する。

エンリケ王子の人物像としては、その辿った足跡が果たしてどこまで事実であるのか、後世の創作によるものであるのか、多くの謎がある。探検事業の動機や目的についても、種々の説がある。

**セウタ遠征**

1414年、21歳となったエンリケは、父ジョアン1世とともに、ジブラルタル海峡に接しイスラーム勢力が立てこもる都市、アフリカ北岸にあるセウタの攻略戦に参加する。翌年8月にはセウタの攻略が完了し、ポルトガルはアフリカ一帯への進出を始める準備が整うこととなった。同時に、この出征において武功を立てたエンリケは騎士に叙され、ジョアン1世によって新たに設けられたヴィゼウ公の位に就いた。



この間、イスラムの地にあって、プレスター・ジョン（葡：プレステ・ジョアン）の伝説を聞き、サハラ砂漠を越えるキャラバンなどイスラム貿易の実態を垣間見るなどしたことで、エンリケはイスラム商人を介することなく金と香辛料を求める活路を見出すために、アフリカ西岸航路の開拓、ひいてはインド航路開拓への野望を抱くようになった、とされる。

**王子の村**

正確な年は定かでなく1416年であるとされているが、ポルトガルの最南西端にあるサン・ヴィセンテ岬の、今日ではサグレスと呼ばれる一帯に、「王子の村」（Vila do Infante）を建設した、とされる。

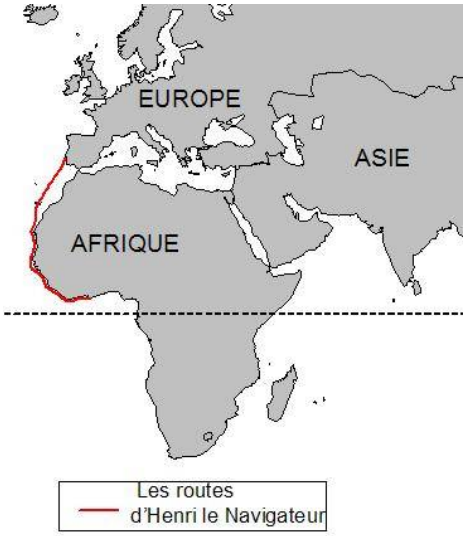
この村に、造船所、気象台（天体観測所）、航海術や地図製作術を学ぶ学校などを建設し、各種の航海術や地図製作技術に大きな発展をもたらした、というものである。この時期に、当時の地図製作の権威の一人である、ジェフダ・クレスケスを招聘し、既存の地図の集成

を行わせ、後の冒険の足がかりを築かせた。同時に、この港の恩恵を被ったことで、この地に程近いラゴスは造船地帯として発展を遂げた。

上記のような話が伝えられているが、この王子の村については裏付けが取れていない部分も多く、存在したこと自体は否定されていないものの、幾つかの逸話については後世の創作ではないかとの疑いもあり、特に航海学校の存在については後世の創作であるとの見方が今日では有力となっている。

**アフリカ西岸の探検**

1419年、前年12月にエンリケが派遣したジョアン・ゴンサルヴェス・ザルコとトリスタン・ヴァス・テイシェイラによって、マデイラ諸島が「発見」され、翌年から植民地化が始められた。これはエンリケの事業にとって、最初の成果となるものである。




1427年、ディオゴ・デ・シルベスがアゾレス諸島を発見し、以後、この諸島においてゴンサロ・ヴェーリョ・カブラルらが探検行を行った。

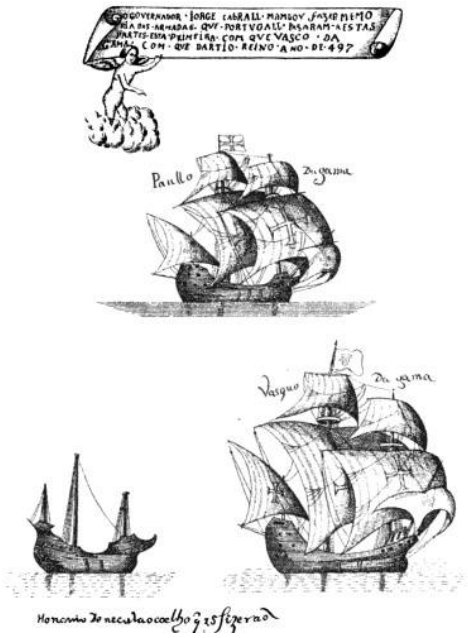
エンリケの時代まで、ヨーロッパの人々に知られていたアフリカ沿岸の最南端の地はカナリア諸島より200キロ南に位置するボハドル岬であったが、この頃、ボハドル岬の先には世界の果てがあり、煮えたぎる海が広がっていると信じられており、当時の航海者の間でこの迷信に対する恐怖は絶大なもので、ボハドル岬を越えての航海を実現させることは不可能に等しかった。エンリケは1422年頃からこの迷信に挑み続け、たびたび探検隊を派遣したが、失敗を繰り返していた。1434年に到って、エンリケがジル・エアネスに与えて派遣した探検隊によって、この地が踏破され、これにより航海者に長く信じられた迷信が打破された。このことは後の未知の地への探検行を促した点で重要な出来事となった。

1433年、死去したジョアン1世の跡を受けてポルトガル国王に即位したエンリケの兄ドゥアルテは、ボハドル岬以遠の新規到達地における商業上の利益の内、その5分の1をエンリケに支払う旨を約した。

1437年、周囲の反対を押し切って北アフリカのタンジールに派兵するが、イスラム勢力に完敗し、失敗に終った。この時、弟であるフェルナンド王子が捕らえられ、王子は40歳で死去するまでの6年間を捕虜としてその地で送ることとなるなどし、この失敗により、エンリケの軍事上の評価は地に落ち、これ以後、エンリケは晩年に到るまで、その身を国内政治と探検事業のみに捧げることとなる。

1438年、ドゥアルテの治世がわずか5年で終わると、エンリケは、ドゥアルテから与えられた自らの特権についての保証を得ることを見返りに、もう一人の兄であるコインブラ公

ペドロを支持し、筋書き通り、ドゥアルテの子で、エンリケとペドロにとっては甥にあたる、わずか6歳のアフォンソをアフォンソ5世として即位させ、摂政となったペドロとともにこれを支えた。このアフォンソ5世の治世において、アゾレス諸島の植民地化が本格的に始まった。



この頃、ポルトガルにおいて新たに開発されたキャラベル船によって、探検事業は飛躍的な進展を遂げることとなる。1441年、ヌーノ・トリスタンとアントン・ゴンサルヴェスによって、現在のモーリタニア沿岸に位置するブランコ岬に到達。1443年にはアルギン湾に達し、1448年にこの地にポルトガルの要塞を築いた。

1444年、バルトロメウ・ディアスの父であるディニス・ディアスがセネガル川とヴェルデ岬に到達。ギニアを訪れると共に、サハラ砂漠の南端に達した。これによりエンリケは、サハラ砂漠を通過するキャラバンに頼ることなくアフリカ南部の富を手に入れる航路を確立するという、当初の目的を達した。アフリカ南部から大量の金を得ることができるようになったことで、1452年にはポルトガルでは初となる金貨が鋳造された。

この時期になると、エンリケは国政の関与においても多忙を極め、後世に残るものとしては、コインブラ大学に天文学の講座を設けるなどの施策を行っている。

1444年から1446年にかけ、およそ14隻の探検船がラゴスの港より出港した。1450年代、カーボベルデにおいて群島が発見され、1460年には探検行は今日のシエラレオネ沿岸にまで達した。

シエラレオネに到達した1460年、エンリケは「王子の村」において66年の生涯を閉じた。その生涯において、シエラレオネに到るまで、エンリケの派遣した船団はアフリカ沿岸の実に2400キロもの距離を踏破した。エンリケの事跡は後のジョアン2世の時代におけるポルトガルの海外進出への道筋を付ける形となり、エンリケの死から28年後の1488年には、バルトロメウ・ディアスによって、ポルトガルはアフリカ最南端の喜望峰を極めることとなる。

大航海時代の幕を開いたエンリケの名は、その死後、「航海王子」の敬称とともに呼ばれ、その名を今日に留めている。